

ニセコに流れてきた若い血液

ニセコ町中央倉庫群館長 松田啓志さん

北海道大学文学院
博士後期課程
崔ブンショウ



コロナ時期の収束がまだ見当たらないが、北海道西南の町でニューライフを始めた若者が動き始めている。

令和3年5月、地域おこし隊員としてニセコ町に移住して一年間を経った今、自分の古着屋を軌道に乗せながら、ニセコ駅前の中央倉庫群の館長に新任した松田啓志さん（28歳）にお話をうかがった。コミュニティを通してニセコ生活を満喫している松田さんが中央倉庫群ないしニセコ町にもたらしてきた活力の源を探ってみよう。

◇なんでもしたい気持ち

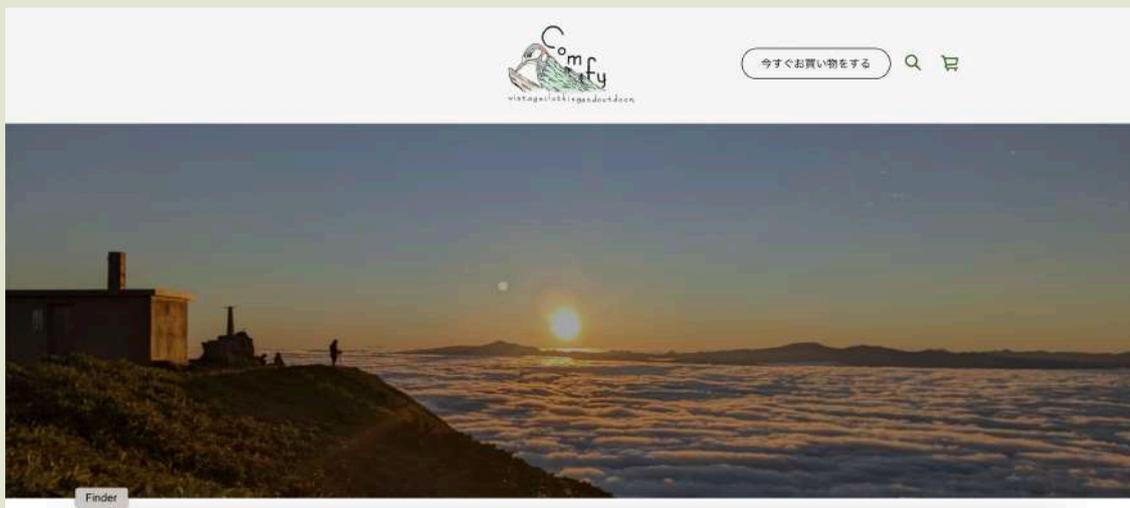
ニセコに移住を決めることは大きな決断に見えるが、松田さんにとってはその2年前に新卒で就職してできた安穏な生活を諦めることの方がより大きな決断だった。靴屋に就職して三年間のサラリーマンの身だった彼は、突然仕事を辞めてワーキングホリデーでバンクーバーに出発することにした。その理由について、松田さんはこう振り返った。

このままずっとサラリーマン続けていても、なんかこう僕の働いていた靴屋には結局ずっと店舗スタッフで、このまま働いて。ショートトリップみたいな感じで網走とか行ったりとかして、その時感じたのはずっと自分の——小さな札幌の中でずっと働いて、その小さなコミュニティー、お店とかそういうコミ

コミュニティだけで終わるのはなんかすごくもったいないなと、思ったんですよ。

バンクーバーでのワーキングホリデー生活を経て、松田さんは彼女と一緒にニセコの地域おこし協力隊に加入することに決めた。ニセコは外国人が多く居住しているというよそと違った町だと印象づけられているが、優れた自然環境と行き届いているサービスを持ち合わせる、つまり田舎と都市の特徴を統合した「田舎なのに、田舎っぽくない」ところは松田さんが魅力的に感じたという。コミュニティの拡大に目を向ける彼にとって、移住者に対する地元民の温情にも魅了された。

協力隊任期の三年間までに、彼女と二人で継続できる事業を考えた結果、たどり着いたのは二人とも興味と経験を持ち合わせたアパレル業だった。



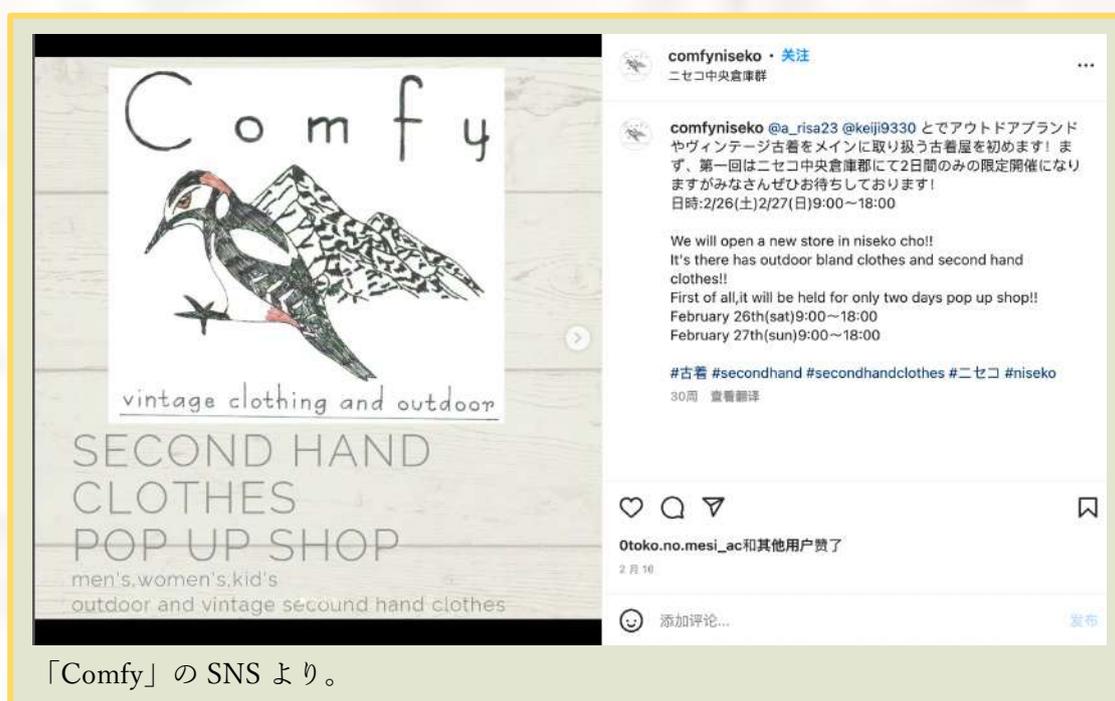
↑松田さんが起業した古着屋「Comfy」の公式サイト。買取るのではなく、アメリカにも仕入しに訪れるファッションショップ。アウトドア系を主に扱うが、普段に着る物のリクエストにも応えるという。

◇肌まで触れ合う古着屋

大学卒業後靴屋に就職していた松田さんはアパレル業界の門外漢ではない。ただ、札幌みたいな大都市に据える商売はどうしても数字登録のような「売ることがメイン」に対して、松田さんはあえて田舎で服屋、しかも若者文化を代表できる古着屋を起業した。

松田さんによると、彼女さんと一緒にニセコ町にやってきた松田さんは二人でできる事業は何か悩んでいた。ニセコには服屋に行って買う文化のないのと、彼女さんと松田さんが二人ともアパレル経験を持ちながら服に興味があるという理由で、起業を決めた。これは一年のニセコ生活を通して見つけたことだが、服屋ではなく古着屋にしたのはまた松田さん自身の考えがあるようだ。

来てくれるお客さんはずっと来てくれる感じです。そのやっぱり求めている人がいるんで、例えば僕らとしても、観光客の人向けっていうよりは、僕は逆にこういう地域の人にやりたい、地域の若い人とか。



「Comfy」のSNSより。

週一でお店はやっているんですけど、何回も来てくれる人が居て。「次はこういう服仕入れてください」みたいな。たぶんそれはおそらく都会にもあるのかもしれないですけど、結構こういう田舎町だからこそ、そのお店の店長の人と普通にお客さんが仲良くなるみたいな。「そのお客さんがこういう方針だね」って、じゃあ、こういう風になったらいいなって言うのを僕らが仕入れてくるっていうのをなんか。今後はもっとそのような人を増やして行きたいんですよ。

古着の生地が触れたのはただの肌だけではなく、松田さんと彼のお店に集まってくる人々の心でもある。人と人を繋ぐ、不思議な力を持っている松田さんが

中心に立ち据えるネットワークは古着屋だけではなかった。

◇コミュニティースペースとしての中央倉庫群

松田さんがニセコ町に地域おこし協力隊員として配属されたのはニセコ駅前の中央倉庫群。ニセコ町のホームページによると、かつて農産物の集積場として賑わっていた倉庫群だったという。まさに人が集るネットワークの場。今残されているのは、昭和6年に建てられた石造り倉庫や、昭和40年代に建てられた旧でんぷん工場。施設老化で倉庫機能が移転したため、ようてい農業協同組合に所有されていた10棟足らずの倉庫群は平成28年(2016年)から、地域活性化の拠点として利用されてきたが、昔の写真に写された盛況には戻っていない。生産機能を失った倉庫群は昔の地元住民の目線から姿が消えた。



当時、駅前の賑わいの様子。

(ニセコ町ホームページより、

https://www.town.niseko.lg.jp/chosei/keikaku/saikatsuyo_mukete/)

現在、松田さんが主に管理している旧でんぷん工場はニセコ町の管轄で、指定された民間の事業者によって管理され、主にコミュニティースペースとして活用されている。講演会、地元イベントを挙げる会場として依頼されることが多い。9月中に、あるNPO法人が他の地域から音楽団体を招いて大きなコンサートを開いた際、ニセコ町民の他に倶知安町などの周辺の人たちが訪れたという。

同時に、駅前温泉「綺羅乃湯」を隣接するのもあり、歴史建築としても有意義

な中央倉庫群の価値はまだ十分に認識されていない。今年4月ニューオープンしたスープカレー・土ノ子は少しずつ観光客を惹きつけているが、ほかの魅力ポイントはまだ十分届いていない。地元の人にも目をつくよう、もっと発信するのは課題だと松田さんは言った。

◇中央倉庫群の新任館長

今年4月から中央倉庫群の館長に新任した松田さん。この施設は昨年度末で3年ごとの指定管理者の更新を迎えた。前年から地域おこし協力隊に参加し、中央倉庫群に配属されていた松田さんはこの流れで館長を務めることになった。それにともなって、松田さんは地域おこし隊員から集落支援員に変身した。

「地域おこし隊は町を盛り上げる役割、集落支援員は見守り役」と言った松田さんはまとめ役として、中央倉庫群を見守る。施設の管理業務以外に、外装の補修や冬の雪かきまでやる。コロナ禍でかなり需要が大きくなったテレワークのスペースに関して、松田さんは素早く一階の空間を区切り分け、専用のスペースを作った。子供スペースと隣接したテレワークスペースは、仕事をやりながら育児をするワーキングマザー・ファザーに愛用されている。さらに、ここに配属された地域おこし隊員の仕事を支え、オリジナル商品を企画している。今、ニセコ町名物のお芋のでんぷんを使ったN I S E K O 農 P O T A T O S E N B E I（ニセコのポテトせんべい）はすでにお土産商店に陳列されていて、カボチャの饅頭に力を入れているところという。

コミュニティの場として位置付けられた中央倉庫群は松田さんの夢にも場所を提供してくれた。週一の古着屋営業は松田さんへの第一歩だという。

自分のお店を持つことが夢なんですね。もちろんニセコ町だったらベストですけど、それがニセコ町じゃなくて最悪いいんですけど。そこで、いろんな場を作りたいんですよ。友達っていうか、そういう人の輪を作りたいんですよ。服を買わなくてもいいから、そこに行くみたいになって知らない人と話して、その人たちがみんな友達になってくれて。そこで一つのコミュニティができて。例えば趣味でそのお客さん同士がどっか出かけたりとか。その一つのお店を持ちたいって夢のためのツールが古着なんですよ。

この夢が町の目指している中央倉庫群の理想図と一致しているのは、松田さ

んが館長に任せた理由の一つだと考えられよう。松田さんが大事にしている「友達」としてのコミュニティはどうしても役場の人間関係性と矛盾しているように見えるが、その辺は自由にやらせてくれているらしい。松田さんは個人事業者のイベントをやりたいというから、これから中央倉庫群に人気が溢れてくることは期待できるだろう。

◇充実なニセコニューライフ

ニセコに移住してきてただ一年ほどだが、松田さんはすでに自分のコミュニティを幅広く広げているように見える。

山登りが趣味で、休日はランニングのコミュニティ。起業したばかりの今、周りの個人事業者のコミュニティから助言と意見をもらっている。古着屋でお客様がついてきていて、友達を連れてきていると松田さんが楽しそうに言った。都市部並みの人数を揃えながら田舎ほど疎遠しないこのニセコのコミュニティライフは、これからもっと発信しようと松田さんは思っている。「館長としては役目としては、ここが人が集まるような場所になればいいな」と、松田さんが言った。



中央倉庫群の旧でんぷ工場の内部